

蕨宿と浦和宿 蕨画塾と浦和画家

2026年3月14日(土)14:00~16:30 埼玉会館 3C会議室

第5回フォーラム まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす

蕨宿と浦和宿 蕨画塾と浦和画家

隣土の蕨と浦和。近世の宿場の様相の違いや、近代以降の文化的交流等から、それぞれの個性の読み解きを試みます。

● 講演

竹田 真依子 (蕨市立歴史民俗資料館学芸員)
「蕨宿と浦和宿 ～近世後期の大通行を事例に～」

高松 敬 (ヘリテージマネージャー・一級建築士)
「蕨画塾塾長 長谷秀雄と、戦後蕨画塾で学んだ浦和をゆかりとする面々」

● コメンテーター
青山 恭之 (建築家、アドリエ・リンク)

蕨市民会館 蕨城址公園に立つ複合施設 設計は前川國男門下で浦和出身の土屋巖(スケッチ:青山恭之)

蕨本陣跡 加兵衛本陣の敷地の一部に建設されたモニュメントで、設計は菊池重郎。谷口吉郎が監修をしている。(スケッチ:青山恭之)

2026年
3月14日(土)
14:00~16:30
(開場 13:30)
埼玉会館 会議棟 3C会議室
聴講無料 (要事前申込・定員100名)
主催: (公財)埼玉県芸術文化振興財団
協力: 美術と街巡り・浦和実行委員会

蕨市立歴史民俗資料館分館 明治時代に織物の寶機を有していた旧金子吉衛邸。彼は蕨市長を2期務め、弟の徳衛は浦和画家。(スケッチ:青山恭之)

中山道蕨宿模型 江戸時代後期の蕨宿の中心部の町並みを再現(蕨市立歴史民俗資料館)

埼玉会館 100th

5回目となるフォーラム「まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす」は、「美術と街巡り・浦和」のイベント・プログラムです。前回(昨年)は、主に大正・昭和初期の浦和・大宮が、台地上にある「高燥の地」として画家をはじめとする文化人たちに注目されてきた歴史を細解しました。その「浦和画家」たちのうち寺内萬治郎・奥瀬英三などが「蕨画塾」の講師としても活動し、県の美術の普及に尽力してきました。また、明治の教育の黎明期に蕨は先進的な働きを示し、後の文教都市浦和を導いたのです。さらに言えば、江戸時代に隣の宿場同士でありながら、浦和と蕨は全く異なる街の構造を示していました。そのことが、現在蕨には何軒もの町屋建築が残されていることにもつながっていると考えられます。江戸期から戦後までの二つの「まち」を見ていくことで、それぞれのアイデンティティが浮き彫りにされればと思っています。(青山恭之)

● 講演者プロフィール

竹田 真依子
(たけだ まいこ)
蕨市立歴史民俗資料館学芸員
國學院大學文学部史学科卒、同大学大学院文学研究科(博士課程前期)修了。蕨市立歴史民俗資料館学芸員(非常勤)を経て現職。近年では近世後期の蕨宿町並図に関する研究を発表している。

高松 敬
(たかまつ けい)
一級建築士、ヘリテージマネージャー
t:t design
工学院大学大学院建築学専攻修士修了。埼玉県内に現存する奉安殿建築やその他の近現代建築物、埼玉ゆかりの建築家 室岡惣七、浜名源吉、宇野俊一、二本松孝蔵、北村甲子之助、土屋巖、三浦功、蕨市に現存する住宅営団三和町住宅地、蕨をゆかりとする芸術家 長谷秀雄、金子徳衛、刀根研二、牛越誠夫、飯塚章の調査にあたる。

青山 恭之
(あやの けい)
建築家、アドリエ・リンク

長谷秀雄自邸 (撮影:昭和7~8年頃)蕨画塾の拠点でもあった ※1

蕨画塾の創始者で塾長の長谷秀雄 ※1

長谷秀雄『若き日』1982 蕨駅西口駅前広場 ※1

「明治30年代前半の浦和の街想像図」画:青山恭之 ※2

明治初期の蕨・浦和・戸田地域の教育に尽力した石川直中 ※2

参加申込方法
聴講無料 定員100名 申込期間:2月8日(日)から
定員に達した時点で締め切らせていただきます。
●申込みフォームでのお申込み QRコードよりご利用ください。
●メールでのお申込み 下記①~⑥を明記のうえお申込みください。
①氏名(漢字) ②氏名(フリガナ) ③電話番号 ④メールアドレス
⑤人数 ⑥同行者氏名 送付先: info-kaikan@saf.or.jp
※件名に「3/14フォーラム参加申込」とお書きください。
●窓口でのお申込み
埼玉会館B1F受付にて申込用紙にご記入ください。 受付時間: 休館日を除く 10:00~19:00
※最新情報は、埼玉会館ホームページをご覧ください。

埼玉会館 SAITAMA HALL
〒330-8518 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-1-4
お問合せ Tel:048-829-2471(代)
休館日を除く 10:00~19:00
Mail: info-kaikan@saf.or.jp
https://www.saf.or.jp/saitama
電車でアクセス JR 宇都宮線・高崎線・京浜東北線・湘南新宿ライン 浦和(西口)下車 徒歩6分

一 記 録 目 次

第1部「蕨宿と浦和宿～近世後期の大通行を事例に～」(竹田 真依子)

蕨市は面積が日本一小さい市	4
「藁の火」が蕨の語源?	5
蕨宿から4つの村を通過して浦和宿	5
本陣が2軒あった蕨宿	6
用水路に囲まれた蕨宿	7

蕨宿より小さかった浦和宿・	7
徳川御三家の日光社参・	8
徳川斉昭は休泊場所の袋戸に「書」を書き残していった・	9
半年以上かけて何パターンも何枚も作られたであろう絵図・	10
蕨市立歴史民俗資料館の特別展と常設展・	11

第2部「蕨画塾塾長長谷秀雄と、

戦後蕨画塾で学んだ浦和をゆかりとする面々」(高松 敬)

昭和10年代の蕨は新しいものを取り入れていく・	13
朝倉文夫との出会いと震災で得た信頼・	14
錚々たる方々が認める彫刻家長谷秀雄・	15
蕨に自邸の提供を受ける・	16
長谷秀雄の実力・	16
蕨で作品を作り続けた長谷秀雄の思い・	17
戦中戦後の物不足の中で作り続けた作品・	19
国宝の複製から、山梨、沖縄、大分に残る作品・	20
浦和に残る作品と埼玉県美術教育の発展を支えた功績・	21
蕨画塾誕生・	22
長谷さんの恩をアトリエ増築で返す塾生たち・	23
公認学校蕨画塾は、絵を切ったら血が出るレベルを目指す・	24
蕨画塾は東京藝大蕨分校・	25
蕨画塾から巣立った美術関係者の活躍ぶり・	26

第3部「隣の芝生を見に行こう」(青山 恭之)

街並みに歴史民俗資料を残す蕨・	28
浦和の中山道の面影は・	28
充実したマップとユニークなマップ・	29
素敵な通りや街並みが残る蕨は散策も楽しい・	31
蕨北小と浦和高砂小を立ち上げた石川直中・	32

第4部 トークセッション

身近に接していた美術の先生も蕨画塾生だった・	33
本の須原屋さんは美術活動にも尽力されていた・	33
歴史をどのように残すか・	34

蕨宿と浦和宿 蕨画塾と浦和画家

山海（進行）：このフォーラムの5回目は、蕨と浦和の関係を探ってみようということで、まず共同企画者でコメンテーターの青山さんから、今日のこのテーマに至った経緯を簡単にご紹介いただいて、登壇者おふたりにバトンタッチしたいと思います。

青山 恭之（あおやま やすゆき）

1958 年、旧浦和市生まれ。武蔵野美術大学大学院修了。妻の永田博子とアトリエ・リングー級建築士事務所を主宰、スペース「つきのみちくさ」を運営。武蔵野美術大学、埼玉大学等での非常勤講師を経て、現在、ものづくり大学非常勤講師。美術と街巡り・浦和実行委員会事務局長。青少年育成浦和高砂地区会会長としても活動。

青山：今、ご紹介いただきました青山恭之です。中山道が小さい頃から遊び場だったという調神社のすぐそばに住んでおります。ずっと浦和の街を調べてきたんですけど、やっぱり蕨が気になるんですね、どうしても。今日の最後に僕のプレゼンテーションもありますけれども、その題名は「隣の芝生を見に行こう」。やっぱり隣の芝生は綺麗に見えるんですよ。浦和建築塾なんて勉強会をやっていて、町家とか民家とかどんどん壊されていっちゃう。特にここ2～3年で、すごく無くなっちゃいましたよね。あのKさんのお宅とか、高田誠のアトリエとか、2～3年前に瑛九のアトリエも無くなっちゃいました、浦和は。だけど、蕨には残ってるんですね。なんでだろうっていうのはずっと気になっていて、それもあって今回は「蕨宿と浦和宿、蕨画塾と浦和画家」っていう、ちょっと変な題をつけました。

山海：では竹田真依子さんに、「蕨宿と浦和宿」についてお話しいただきます。



第1部「蕨宿と浦和宿～近世後期の大通行を事例に～」

竹田 真依子(たけだ まいこ)

蕨市立歴史民俗資料館学芸員

國學院大學文学部史学科卒、同大學大学院文学研究科（博士課程前期）修了。蕨市立歴史民俗資料館学芸員（非常勤）を経て現職。近年では近世後期の蕨宿町並図に関する研究を発表している。

蕨市は面積が日本一小さい市

竹田：皆さんこんにちは。青く見えている隣の芝生の蕨市からやってきました、蕨市立歴史民俗資料館の学芸員の竹田と申します。

私は大学院を卒業した後に、蕨市立歴史民俗資料館の非常勤の学芸員として採用されて、令和4年の4月から正規の学芸員として勤務しております。もう10年以上ここには勤めていますが、まだ若い気持ちでいる学芸員でございます。

蕨市立歴史民俗資料館は、浦和駅から京浜東北線に乗って2駅、蕨駅が最寄りの駅になります。中山道沿いに建つ小さな資料館なんですけれども、来ていただいたことがある方いらっしゃると思います。結構いらっしゃるようで、ありがとうございます。

今回は、「蕨宿と浦和宿～近世後期の大通行を事例に～」というテーマにしました。蕨宿と浦和宿の、まず基本的な情報を押さえつつ、近世後期の大通行の事例を、蕨宿の史料から拾ってお話しさせていただければと思います。

まず現在の蕨市ですが、日本で一番小さな市になります。面積は、5.11平方キロメートル、人口が約7万7千人です。ちなみに皆さん、2番目に小さな市はどこかご存じですか？東京都狛江市だそうで、面積は6.39平方キロメートルです。逆に一番大きな市はご存じですか？岐阜県高山市で、ほぼ東京都と同じぐらいだそうです。

蕨市は市としては一番小さな市ではあるんですけども、自治体単位で見ると全国で8番目に小さい自治体になります。蕨市には、さいたま市と戸田市と川口市が隣接しています。

蕨市について

●日本で一番小さな市

・面積…5.11㎢ ・人口…約7.7万人（令和8年1月現在）

●地名の由来

・植物の「ワラビ」説

・「蕨の火」説…在原業平が蕨の火で暖を取った or
源義経が蕨の煙を見て「蕨火」と付けた

主催：(公財)埼玉県芸術文化振興財団 協力：美術と街巡り・浦和実行委員会
第5回フォーラム まち・いち・たてものを、愛でる・いじる・生かす 蕨宿と浦和宿 蕨画塾と浦和画家

蕨宿と浦和宿 ～近世後期の大通行を事例に～

2026年3月14日(土) 埼玉会館

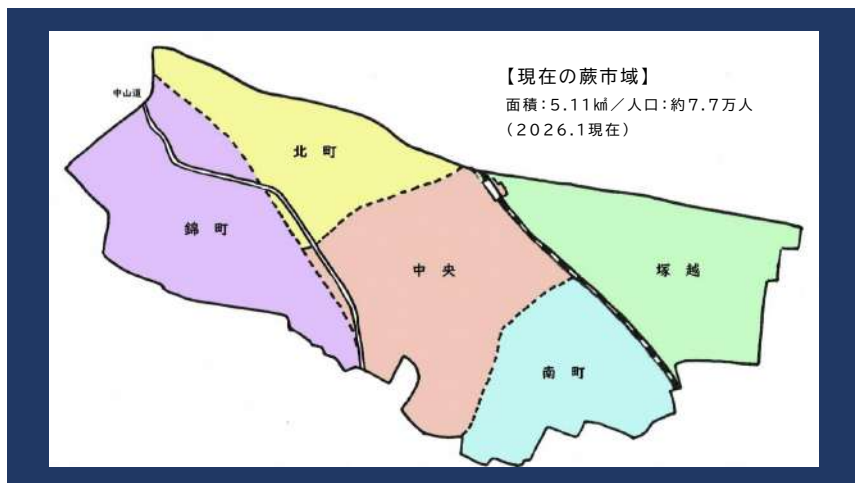
蕨市立歴史民俗資料館 学芸員 竹田 真依子

「藁の火」が藁の語源？

「藁」という地名の由来は、はっきりとはしていませんが、植物の「ワラビ」から取ったという説、それから「藁の火」が語源になったという説があります。この「藁の火」という説で代表的に言われる伝承としては、源義経が藁の煙がたなびく美しい景色を見て「藁の火」→「藁火」と名付けたという説ですとか、在原業平が「藁の火」のもてなしを受けたからというような説があります。実際に史料に出てくる藁という地名は、植物の「藁」と表記したものが初出になります。

こちらが、現在の藁市の市域です。今は、北町、中央、錦町、南町、塚越の5地区からなっております。明治22年に、藁宿と隣の塚越村が合併をして藁町ができ、昭和34年に藁市になっています。合併はこの1回かぎりです。

錦町・北町・中央に旧中山道が通っています。川口市との境目あたりに藁駅があり、駅の開業は明治26年です。



藁宿から4つの村を通して浦和宿

中山道について

- 慶長7年(1602)から整備が始まった街道。五街道の一つ。
- 江戸日本橋を起点に守山宿(滋賀県守山市)まで67宿、草津宿(滋賀県草津市)で東海道と合流して、京都三条大橋までをつなぐ全69宿。
- 藁宿は2番目、浦和宿は3番目の宿場町。
埼玉県域には藁・浦和・大宮・上尾・桶川・鴻巣・熊谷・深谷・本庄の9宿。

次に中山道について、簡単にご説明したいと思います。中山道は、慶長7年から整備が始まった街道で五街道の一つです。江戸の日本橋を起点に守山まで67宿、その後、東海道と合流して京都三条大橋までをつなぐ、全部で69宿です。東海道が海沿いの道を行くのに対して、中山道は江戸(東京)から埼玉、群馬、長野、岐阜、滋賀を通して京都に至る街道です。宿場というのは、大名や旅人が

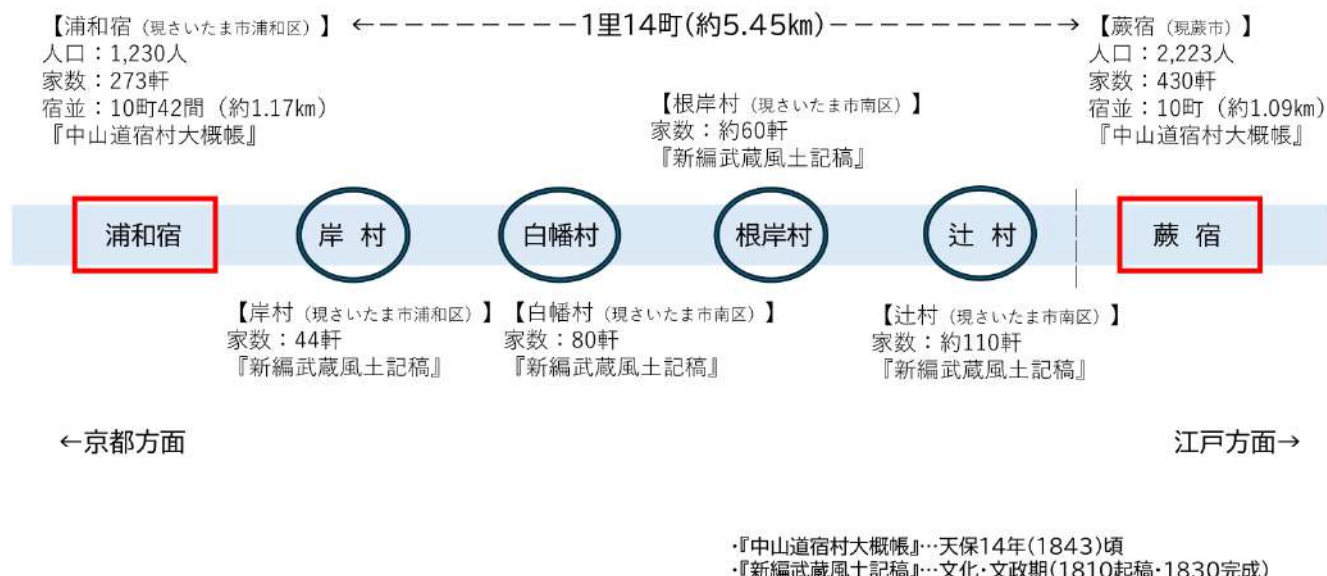
休憩、宿泊などをする町のことです。宿場には本陣や脇本陣、旅籠屋などが建ち並んでいます。

藁宿は中山道の2番目の宿場です。江戸の日本橋を出て板橋宿、藁宿とあり、浦和宿は3番目の宿場になります。埼玉県域には、藁、浦和、大宮、上尾、桶川、鴻巣、熊谷、深谷、本庄の9宿があります。

こちらの図は、藁と浦和の間の概略を示したものです。幕府が中山道の統計を調査した『中山道宿村大概帳』という史料を元に作成しました。天保14年の藁宿は人口が2,223人、家数が430軒、宿並が南北10町、約1.09キロメートルになります。

藁宿から浦和宿までの間が1里14町、約5.45キロメートルです。浦和宿は人口が1,230人、家数が273軒、宿並が南北10町42間、約1.17キロメートルです。

中山道 蕨宿・浦和宿間概略図



蕨宿と浦和宿というのは、中山道の宿場同士ということでは隣り合っているんですが、間には辻村、根岸村、白幡村、岸村の四つの村があります。現在の市境でいうと、蕨宿は蕨市で、辻村以降がさいたま市になります。江戸時代後期の文化文政期に編纂された『新編武蔵風土記稿』によりますと、辻村は家数が約110軒。隣の根岸村は家数約60軒。その隣の白幡村は家数80軒。さらにその隣、浦和宿に入る手前の岸村は家数44軒となっております。

本陣が2軒あった蕨宿

次に蕨宿の基本的な情報についてお話ししたいと思います。蕨宿の成立は、慶長17年頃と推測されます。江戸からは20キロメートルほど離れており、荒川から距離を取って蕨宿をつくったと考えることができます。『中山道宿村大概帳』によれば、蕨宿には大名が休泊する本陣が2軒、本陣に次ぐ格式の脇本陣が1軒、旅籠屋は23軒ありました。

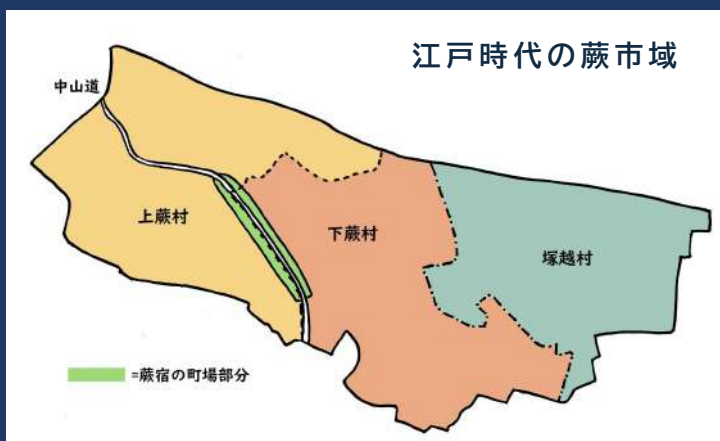
蕨宿は加兵衛家と五郎兵衛家の2軒が本陣を務めていました。2軒の本陣は、蕨宿の中心部の中町に中山道を挟んでほぼ向かい合わせに建っていました。中山道の宿場で本陣が2軒あるというのは珍しいようなのですが、蕨宿の場合はどうやら荒川が関係しているようで、川が増水になって、大名が川止めで蕨宿に逗留するとなると、浦和宿から次の大名行列が来た時に鉢合わせてしまう。それを防ぐために本陣が2軒あったのではないかとされており、江戸時代を通して、本陣と脇本陣の数は2軒と1軒のまま変わっ

蕨宿について

蕨宿は中山道2番目の宿場町／成立は慶長17年（1612）頃。

- 天保14年（1843）頃の蕨宿（『中山道宿村大概帳』）
 - ・人口…2,223人
 - ・家数…430軒
 - ・宿場の長さ…南北10町（約1.09km）
 - ・本陣2軒（加兵衛家・五郎兵衛家）・脇本陣1軒・旅籠屋23軒

ていません。旅籠屋の数については、記録に現れるところだけで見ると、大体20軒前後で推移しているようです。



検地帳などを元に江戸時代の蕨市域を簡単な図で示すと、上蕨村、下蕨村、塚越村に分かれています。緑色の部分が蕨宿の町場部分です。上蕨村の検地帳と下蕨村の検地帳と分けて作成されており、このふたつの村が合わさって蕨宿とご理解いただければと思います。

下蕨村の隣には塚越村があります。加兵衛本陣と五郎兵衛本陣は本家と分家の関係にありますが、五郎兵衛家は蕨宿の中心に住みながら塚

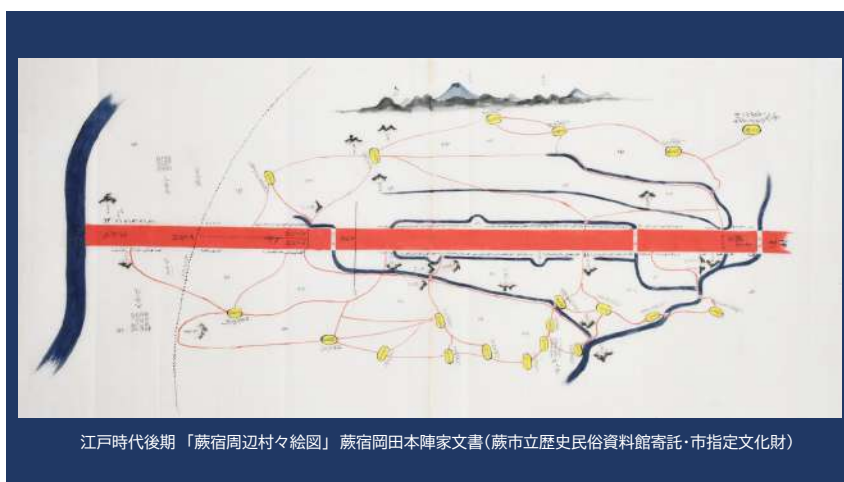
越村の名主も務めているという、ちょっと珍しいパターンです。江戸時代から蕨宿と塚越村というのは密接な関係にありました。

用水路に囲まれた蕨宿

次に、蕨宿と周辺の村の様子を描いた絵図をご紹介します。年代の特定はできませんが、江戸時代後期の絵図であると思われます。真ん中に描かれている赤い道が、中山道です。左側に荒川が、上部には不二山（富士山）が描かれています。

どうしてこの絵図が作成されたのかは、はっきりとしていませんが、文久元年の和宮の下向（10頁参照）時に代官だった人物の名前が記されています。おそらく蕨宿やその周辺の大まかな景観と、人馬を補助する助郷村への道筋を描いたのではないかと思います。

蕨宿の特徴として用水路が町場の周りぐるっと囲っていたことが挙げられます。この用水路がいつからできていたとか、細かいところはわかりませんが、田んぼの灌漑の用水などに使われていたようです。



蕨宿より小さかった浦和宿

次に、浦和宿についても基本の情報を見ていきたいと思います。浦和宿は中山道3番目の宿場町、戦国時代の末期には宿並が形成されていたとされています。本陣が1軒、星野権兵衛家が務めました。現在の仲町公園が本陣の敷地の一部で、かなりの広さがあったよ

浦和宿について

中山道3番目の宿場町／戦国時代末期には宿並が形成。

- 天保14年(1843)頃の浦和宿 (『中山道宿村大概帳』)
 - ・人口…1,230人
 - ・家数…273軒
 - ・宿場の長さ…南北10町42間(約1.17km)
 - ・本陣1軒(星野権兵衛家)・脇本陣3軒・旅籠屋15軒

うです。蕨宿と比較すると、浦和宿は蕨宿の半分とまではいきませんが、少し小さな規模の宿場であったことが分かります。2と7のつく日には市が立ってにぎわっていたそうです。

文化8年に描かれた浦和宿の絵図をご紹介します。さいたま市立浦和博物館から画像をご提供をいただきました。

5.21メートル X 3.41メートルという非常に大きな絵図で、さいたま市の指定文化財になっています。浦和市時代の文化財の調査報告書(『浦和市文化財報告書』第37集)によれば、浦和市役所で保管されていたものだそうで、おそらく星野本陣から戸長役場、町役場、市役所へと引き継がれたものであろうとのことでした。現在はさいたま市立浦和博物館の所蔵となっています。この絵図の裏には、宿役人らが立ち会いの上で、検地帳と照らし合わせて作成した図であると記されているそうです。中央を通る赤く描かれた道が、中山道です。調神社や玉蔵院、星野権兵衛本陣、高札場も描かれております。浦和宿全体を描いた絵図としてはこれが唯一のものです。



文化8年(1811)「浦和宿絵図」(さいたま市立浦和博物館所蔵・市指定文化財)

星野権兵衛本陣の古文書というのはごくわずかだそうなので、今回は蕨宿の加兵衛本陣の古文書から、浦和宿との関わりについて探ってみたいと思います。

徳川御三家の日光社参

天保14年の日光社参についてお話ししたいと思います。日光社参とは、徳川家康の命日である4月17日に合わせて、将軍家が日光東照宮に参拝することを行います。江戸時代を通して19回実施されているそうなのですが、三代目の家光が最も多く実施しており、中期以降は頻度が落ちていきます。天保14年には、十二代将軍の家慶の社参が行われていますが、実に前回から67年ぶりの社参でした。

将軍は、江戸を出発して中山道を途中まで行き、板橋宿には至らずに1里の場所にある本郷追分で曲がって、日光御成道という街道を行きます。その後、幸手で日光道中に合流し東照宮を目指すというルートを通ります。ここでは、将軍とは異なるルートを通った徳川御三家の通行記録について、蕨宿の加兵衛本陣家の日記、もしくは休泊覚などの資料から見ていきます。

加兵衛本陣の休泊の記録を元に、徳川御三家の社参ルートを表にしました。水戸徳川家・尾張徳川家・紀州徳川家の御三家は途中まで中山道を通行しています。休泊記録には、当初の予定から変更になった部分も記されており、紀州藩の場合は、往路の泊まりが大宮

天保14年(1843) 日光社参

- 12代將軍徳川家慶の日光社参に伴い、徳川御三家が中山道→日光脇往還を往復。(將軍は日光御成道→日光道中)

水戸徳川家			尾張徳川家			紀州徳川家		
往 路			往 路			往 路		
4月10日	浦和	楊川	4月11日	浦和	上尾	4月11日	蕨	大宮→浦和→変更
4月11日	新郷	佐野	4月12日	行田	佐野	4月12日	楊川	行田
4月12日	板橋	鹿沼	4月13日	板橋	鹿沼	4月13日	熊林	大宮
4月13日	板橋	大森	4月14日	文珠	大森	4月14日	板橋	大森
復 路			復 路			復 路		
4月20日	板橋	鹿沼	4月19日	文珠	鹿沼	4月19日	鹿沼	板橋
4月21日	板橋	佐野	4月20日	板橋	上尾	4月20日	熊林	行田
4月22日	新郷	楊川	4月21日	行田	上尾	4月21日	楊川	浦和
4月23日	浦和	御宿	4月22日	浦和→蕨に変更	御宿	4月22日	蕨→板橋に変更	御宿

「蕨宿通行大名休泊覧」(『新修蕨市史』資料編二 558～559頁)

宿から浦和宿に変更になっていたり、尾張藩の帰路、お昼を浦和宿から蕨宿に変更したことが記されています。

この表を見てみると、水戸藩の往路は4月10日、浦和宿でお昼をとっており、復路の4月23日も浦和宿でお昼をとっていることがわかります。

尾張藩と紀州藩の往路は、蕨宿・浦和宿ともに同じ4月11日に来ています。どちらの宿場にとっても大変な出来事だと思えますが、尾張藩が午前10時頃に蕨宿に到着して小休、浦和宿でお昼。後に紀州藩が午後1時頃に蕨宿に到着してお昼をとっているのです、その後浦和宿に行ったんだらうということがわかります。

加兵衛本陣で紀州藩の料理人が作って藩主に出した昼食のメニューが書き記されておりましたので、レジュメの方に記載しております。

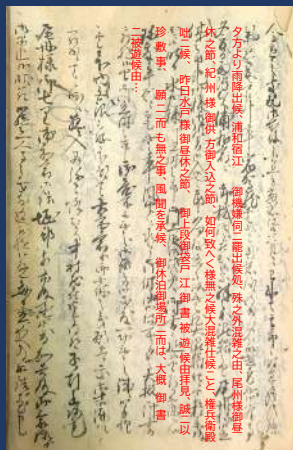
【昼食メニュー】(紀州藩主の料理は随行の料理人による)
 ・平椀(煮物)…竹の子・長芋・ふき・焼豆腐・切りするめ
 ・猪口…豆 ・汁…豆腐 ・香の物…沢あん ・飯

徳川斉昭は休泊場所の袋戸に「書」を書き残していった

●加兵衛本陣の日記に見る日光社参時の星野権兵衛本陣との交流

- ・4月11日、尾張藩・紀伊藩が蕨宿を出発した後、加兵衛が星野家へ訪問。
- ・浦和宿の混雑の様子や、前日に星野家の上段の間の袋戸に、水戸藩主(徳川斉昭)が書を書いたことなどが記されています。

「(日記留)」天保14年4月11日条・
(蕨市立歴史民俗資料館所蔵)



ここで加兵衛本陣が記した日記を見てみたいと思います。この日記は、部分的に書籍で紹介されていますが、今からご紹介する部分は恐らくどの書籍にも原文翻刻はされていないので、原本をご紹介します。

これは4月11日、尾張藩と紀州藩が蕨宿を出発した後の出来事を記したものです。「夕方より雨降出候、浦和宿江御機嫌伺二罷出候

処、殊之外混雑之由」。蕨宿の用が済んだから浦和宿に加兵衛が出向いたと記されています。浦和宿はとても混雑していたようです。

「尾州様御昼休之節、紀州様御供方御入込之節、如何致へく様無之候大混雑仕候こと、権兵衛殿咄二候」。尾張藩がお昼休憩をとっていたところに、紀州藩の御供方が入り込んでしまい、どうしようもない大混雑だったと、権兵衛が加兵衛に話していたという記述です。

「昨日(4月10日)水戸様御昼休之節、御上段御袋戸江御書被遊候由拝見、誠二以珍敷事」。前日、水戸藩が浦和宿でお昼をとった時に、権兵衛本陣の上段の間の袋戸に水戸藩主の徳川斉昭が書を書いたそうです。これを加兵衛が見て、とても珍しいと感心している記述です。

「風聞を承候、御休泊御場所ニ而は、大概御書ニ被遊候由・・・」。水戸藩主は、休泊する場所には大体書を書くという噂だそうです。このように加兵衛の日記からは、浦和宿の通行の様子が少し見えてきます。

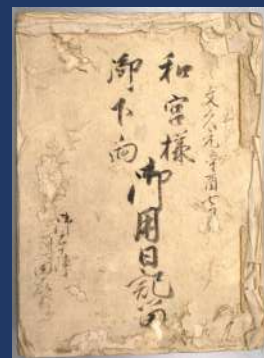
半年以上かけて何パターンも何枚も作られたであろう絵図

和宮の下向に関しては、加兵衛本陣に複数の関連資料が残されています。「和宮様御下向御用日記留」という資料には、和宮下向に関する通達や廻状、日々の出来事が書き記されています。これは『蕨市史調査報告書 第3集』として刊行されていますので、気になった方はお手にとっていただければと思います。中山道に向けた通達が書き記されているということは、蕨宿と浦和宿は近い時期に同じような動向であったと思われます。廻状であれば、蕨宿と浦和宿ではほぼタイムラグがなく伝わっていると思います。

日記留を見ていくと、和宮の下向日程としては、蕨宿に到着するのは11月14日のことですが、日記留には同年2月からの記事があります。文久元年2月5日に蕨宿の役人が、代官所で和宮の下向のルートが中山道になる旨を伝えられ、宿絵図を作成するよう命じられます。おそらく、宿場の現状の把握などを目的としたのではないかなと思います。

その後、3月から10月にかけて、道中奉行ですとか御徒目付といった役人から、宿絵図を作るよう命令が出されています。宿割や、防犯上必要だったものと思いますが、日記留からは複数人で時間をかけて絵図を作成している様子がうかがえます。宿絵図には家主の名前と職業、家の規模などが細かく記されています。宿場にとっては、とても労力がかかった作業であつたろうと思います。

文久元年(1861) 皇女和宮下向



文久元年(1861)『和宮様御下向御用日記留』
 藤宿岡田本陣家文書(藤市立歴史民俗資料館寄託・市指定文化財)

和宮の休泊割は8月13日に蕨宿に通達されました。浦和宿は昼休、蕨宿は小休となっています。ここでやはり荒川の川止めに備えて、蕨宿では小休の準備、宿泊の準備も行いました。当日は予定どおり、小休に終わっています。

こちらが、文久元年の蕨宿町並図（宿絵図）です。長さが5.5メートルほどあり、資料館の常設展にある蕨宿のジオラマの参考にもなっています。こういった絵図は、蕨宿の歴史を知る上でとても重要な資料です。

文久元年(1861)蕨宿町並図



蕨宿のジオラマ(当館)



文久元年(1861)蕨宿町並図 蕨宿岡田本陣家文書(蕨市立歴史民俗資料館寄託・市指定文化財)

蕨市立歴史民俗資料館の特別展と常設展

現在開催中の第45回特別展「中山道蕨宿のランドスケープ」(前期2026/2/22~4/2、後期4/4~5/10)の後期では、文久元年の蕨宿町並図のほか、郵政博物館所蔵の天保3年の蕨宿町並図などを展示いたします。

常設展のジオラマは、今回のフォーラムのチラシの背景にも使っていますが、本陣や脇本陣、旅籠屋やその他の商家などの家並がよくわかるものになっています。

蕨市立歴史民俗資料館は、中山道沿いに立つ資料館です。蕨駅から徒歩約15分。常設展では、今回紹介した加兵衛本陣家の資料を展示しています。ぜひお越しいただければと思います。

こちらが主な参考文献です。ぜひご参考にしていただければと思います。ありがとうございました。

蕨市立歴史民俗資料館(蕨市中央5-17-22)

- 中山道沿いに建つ資料館
(JR蕨駅から徒歩約15分)

- 常設展では、岡田本陣家資料の展示や蕨宿の1/200ジオラマ、本陣上段の間の再現展示も。

- 現在、第45回特別展
「中山道蕨宿のランドスケープ」
開催中。入場無料です。



蕨宿のジオラマ(当館)

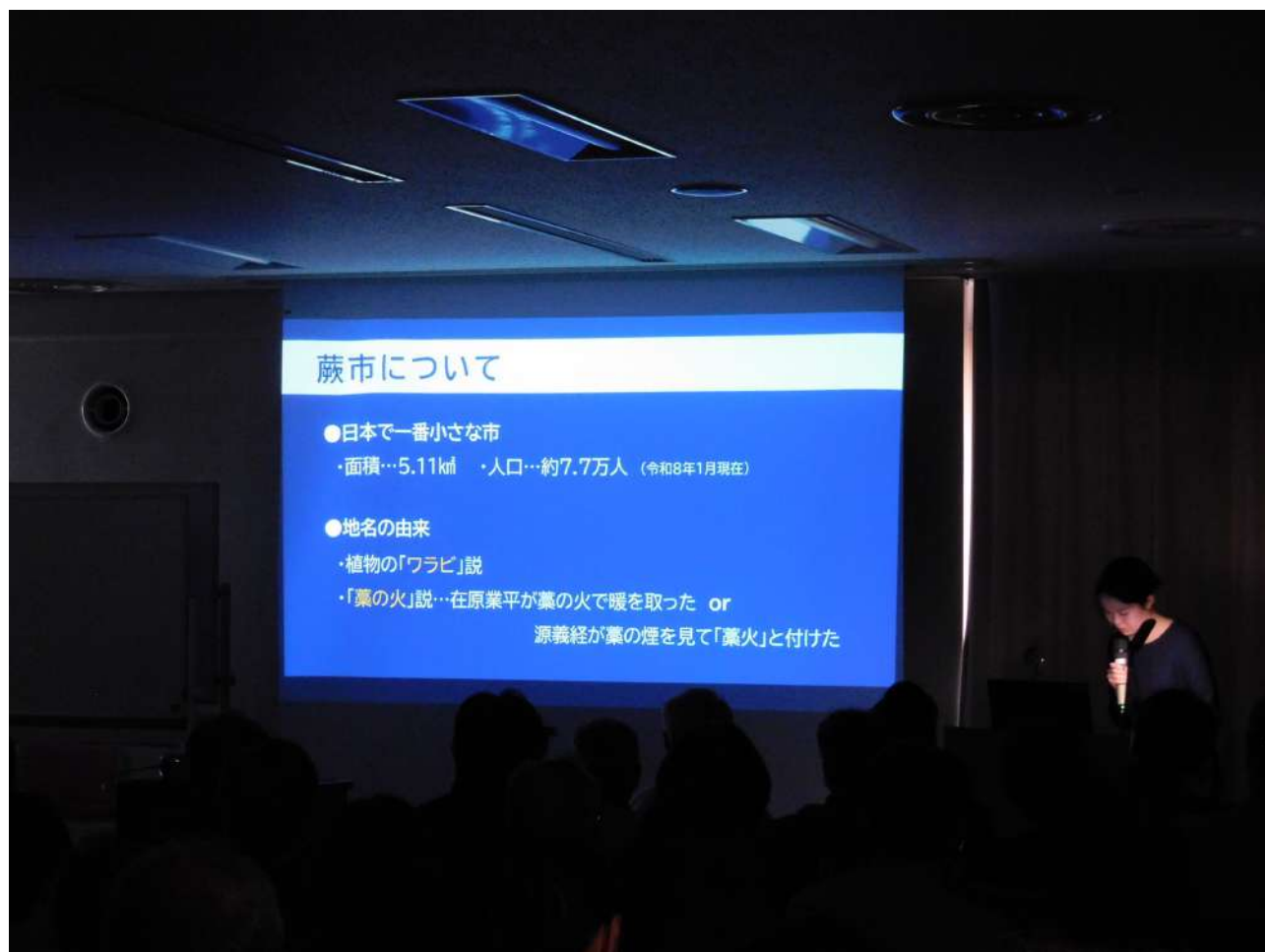
主な参考文献

〔自治体史・紀要・論文〕

- ・『蕨市の歴史』1・2巻（吉川弘文館、1967年）
- ・『新修蕨市史』通史編（蕨市編、1995年）
- ・『新修蕨市史』資料編2 近世（蕨市編、1994年）
- ・『浦和市史』通史編2（浦和市総務部市史編さん室編、1988年）
- ・『浦和市史』第3巻 近世史料編3（浦和市総務部市史編さん室、1984年）
- ・『新編埼玉県史』通史編4 近世2（埼玉県編、1989年）
- ・『蕨市立歴史民俗資料館研究紀要』（年に1回発行）
- ・拙稿「蕨宿町並図とその作成過程」（根岸茂夫編『近世人の身分格式と地域社会』岩波書店、2025年）

〔一次資料刊行物〕

- ・『中山道分間延絵図』第1巻（東京美術、1976年）…寛政12年（1800）測量開始、江戸幕府作成の街道絵図。
- ・『大日本地誌体系13 新編武蔵風土記稿』第7巻（雄山閣、1996年）…文化・文政期の武蔵国の地誌。
- ・『近世交通史料五 中山道宿村大概帳』（吉川弘文館、1971年）…天保14年（1843）の中山道筋に関する統計。
- ・『蕨市史調査報告書第3集 和宮様御下向御用日記留』（蕨市、1987年）
- ・『埼玉県史料集第7集 中山道浦和大宮宿文書』（文書館編、1975年）



第2部「蕨画塾塾長長谷秀雄と、 戦後蕨画塾で学んだ浦和をゆかりとする面々」

高松 敬（たかまつ たかし）

一級建築士、ヘリテージマネージャー t・t design

工学院大学大学院建築学専攻修士修了。埼玉県内に現存する奉安殿建築やその他の近現代建築物、埼玉ゆかりの建築家室岡惣七、浜名源吉、宇野俊一、二本松孝蔵、北村甲子之助、土屋巖、三浦功、飯塚章、蕨市に現存する住宅営団三和町住宅地、蕨をゆかりとする芸術家長谷秀雄、金子徳衛、刀根研二、牛越誠夫の調査にあたる。

昭和10年代の蕨は新しいものを取り入れていく

高松：「蕨画塾」って知ってる人はいますか。ありがとうございます。これから、その塾長と浦和をゆかりとする面々ということで話を進めさせていただきます。

右が、蕨画塾に掛かった看板です。塾長の長谷秀雄さんがお作りになられたものです。結構大きいものでした。現存しないですが、写真に残っているので大変ありがたい。このような資料があることで話を進められますので、資料をお持ちのご遺族の方には感謝するしかありません。

実は私、建築士なんですけど、どうして彫刻家とか画塾を調べるのか。建築はすごく幅がありまして、歴史系の研究室に所属していました。歴史系は実証主義で資料をもとに研究するので、蕨画塾も同じように展開できるのではないかということから、調べているところです。

『蕨画塾塾長 長谷秀雄と戦後、蕨画塾で学んだ浦和をゆかりとする面々』



高松 敬

建築に係わるものが何故、彫刻家の長谷秀雄や蕨画塾を調べるのか。

専攻が建築といえど歴史系、この分野は歴史とあるよう対象が広く、調べ方も専攻の基本である実証主義を踏襲できる。

蕨は、昭和のはじめから同10年代前半にかけ、新しい波が建てづげに到来する。なかでも建築は、

建築家 北村甲子之助のアトリエと住居

シェルのガソリンスタンド

ダンスホール「シャンクレー」(建築家 佐藤武夫の設計)

彫刻家 長谷秀雄のアトリエと住居

という最先端の建築が蕨に誕生する。

蕨は、昭和10年代の前半にかけて、とんでもなく発展っていうか、新しいものを取り入れていきます。それが、建築家の北村甲子之助（きねのすけ）さんの事務所と住居、シェルのガソリンスタンド、ダンスホール「シャンクレー」（佐藤武夫の設計）。「シャンクレー」は今回、歴史民俗資料館で詳細な報告をまとめていますので、欲しいという方があれば一報入れていただければ手に入ります。そして、彫刻家の長谷秀雄さんの自邸。正直、蕨

には不似合いなぐらいかっこいい建物が作られました。

今回の発表は、歴史民俗資料館紀要の11号と20号でまとめたものとなります。主に作品にかかわる資料を使っていますが、これは、長谷さん本人が持っていたものです。長く手元に置いてたもので、長谷さんが亡くなってから、長谷秀雄家を継承されたご当主様が保存と維持・管理に尽力されています。これらを使わせていただくことができたので、紀要をまとめ、今回の発表もできるということで、改めてお礼を申し上げます。

発表は、この2冊とともに私の方で新しい視点を入れたものを加え、これらについては出典を書かせていただいた上で、発表いたします。

今回の内容

蕨市立歴史民俗資料館紀要第11号拙稿
《史料紹介》蕨画塾関係史料 〈2014〉

同 第20号拙稿

「彫刻家—長谷秀雄が手掛けた 作品などについて—」 〈2023〉

をもとに一部、追加事項を加えた。

これらに用いた史料は、長谷が若きころから生涯を終えるまで手元に置いていた自身の作品や作品を紹介するために作成された絵葉書、作品集、展覧会の目録、写真、新聞記事からなる。

長谷が没した後は、長谷秀雄家を継承したご当主様が保存と維持・管理に尽力されている。

拙稿は、格別のご高配を賜り、使用する機会を得た。改めてここにお礼を申し上げます。

なお以降に示す内容は、特記の無い限り、

蕨市立歴史民俗資料館紀要第11号拙稿

《史料紹介》蕨画塾関係史料 〈2014〉

同 第20号拙稿

「彫刻家—長谷秀雄が手掛けた 作品などについて—」 〈2023〉による。

朝倉文夫との出会いと震災で得た信頼

蕨にとって長谷秀雄は、

大恩人のひとり！

卒業した後、学校に行かないものは働くということで書店員になります。その間、夜間の中学校に行って勉強をしたそうです。けれども、「書店の暖簾分けがある。これはやれない」となって、家出同然に僧侶見習いになります。その先が一燈園。そこで修行僧になった。京都では中世の彫刻なんかをみて、自分は彫刻をやりたいと考えて、自分になったけれど、もっと近代的な彫刻をやりたいとい

まず、「蕨にとって長谷秀雄さんは大恩人」です。戦後すぐに、蕨を全国的に知らしめたのは、成人式を始めた高橋庄次郎さんなんですが、同じ時期、北海道から宮崎県まで蕨という名を知らしめてくれたのが、長谷秀雄さんと「蕨画塾」です。

彫刻家の長谷秀雄さんの経歴は次のようになります。お生まれは、大分の別府です。小学校を

彫刻家 長谷秀雄（1900～1986）

大分県別府市に生まれ、旧制の小学校を卒業後、書店員、旧制夜間中学、僧侶見習いを経て、大正12（1923）年、日本画家 福田平八郎らの紹介で、同郷の彫刻家 朝倉文夫に師事することになった。

翌13年に東京美術学校（現東京芸術大学）彫刻選科塑造部に入学、昭和4（1929）年 同校を卒業、同年同研究生となり、昭和7年同研究生を終える。

この後、恩師の朝倉、学生時代に知遇を得た細川護立を中心に、近衛文麿、大谷尊由、安達謙蔵といった面々の後援を得て、彫刻家としての道を歩み始めた。

う思いが強くなって、その道が開けないかと考えていたところ、同郷の日本画家であった福田平八郎さんを紹介してもらうことが叶い、福田さんから朝倉文夫さんという生涯の師と知り合う機会を得て、朝倉彫塑塾で修業を始めることになります。

これが大正12年なんですけど、東京に来たのは7月ぐらいなんです。2ヶ月後に、関東大震災があり、長谷さんはその時、朝倉さんの作品を守らなきゃいけないと一生懸命手を尽くしたほか、塾の外でもいろんな活動をされた。ただ、大人の世界なんで、俺がやったという人も何人かいたようです。それが「いや、あれは全部長谷くんがやってくれたんだよ」ってことが知られることになって、朝倉さんは「そういうことはちゃんと言いなさい。黙ってなくていいんだよ」とおっしゃって、こういう師匠に勉強させてもらってよかったなというのと、長谷は信用できるということで、それ以降、朝倉さんから「長谷くん、長谷くん」と話が出てくるようになったと、長谷さんがご遺族に話していたそうです。

錚々たる方々が認める彫刻家長谷秀雄

翌13年に東京美術学校、今の藝大で技術を中心に勉強する彫刻専科に入って勉強します。予科と本科で5年、卒業した後は研究生となって3年、あわせて8年の学生生活を終えて、彫刻家として身を立てることになります。

学生の時からお付き合いがあった細川護立さんという細川家の殿様に可愛がられ、細川さんとの関係から近衛文麿さんとか大谷尊由さん、当時衆議院の議長をやった安達謙蔵さんの後援を得て、本格的に彫刻家としての道を歩むようになります。大谷さんは、インドの方に旅行（探検）に行った大谷一族の大谷光瑞さんの弟さんで、お兄さんが外国に行ってる間、寺務は全部やるっていうぐらいの実力のある方だったんです。

左の写真の左が学生時代の作品で、文展（文部省が主催した日本初の官設公募美術展覧会：文部省美術展覧会）、今の日展ぐらいの展覧会入選作です。このモデルが、有名なシャンソン歌手の淡谷のり子ではないかという話があります。というのも、淡谷さんは昔、上野のモデル専門の会社の方にアルバイトなんでしょうけれども、仕事をもらってた時期があって、「モデルをやりました」とっていうことを話しています。



右が自像で、卒業制作になります。卒業制作は、基本的に学校に残すってことになってるんですけど、この作品は学校には残ってなかったらしいんです。長谷さんはこれをいろんな展覧会に出してるようなので、この作品に対しての思いがいっぱいあったってことですね。

長谷と蕨の関り

親鸞聖人尊像の制作を契機に、長谷の要望を受けた大谷尊由がアトリエと住居からなる自邸と土地の手当てを含め、その一切を提供したことをはじまりとした。

長谷は、後にアトリエと自邸を「浩然居」と名付けた。



自邸の位置は、上野駅から乗換えの必要がなく、駅から歩いて10分以内で土地の価格が安く、静かな環境であることが条件で、これらを満たしたのが、埼玉県北足立郡蕨町土橋（現中央3丁目27番地）であった。

自邸は24畳のアトリエと6畳の居室、台所、便所、浴室で、このうち居室の6畳は当初、4畳半で計画されたが、細川護立に要望して6畳に変更された。

蕨に自邸の提供を受ける

ここからが蕨との関わりになります。独立してすぐに、私の身長より大きい親鸞聖人尊像を作ることになるんですけれども、頼んだ人が大谷尊由さんです。その大谷さんが、「作るところ、住むところを用意し

ましょう」ということで、その一切を提供したっていうのが始まりになります。長谷さんは、一切出してません。長谷さんの実力を大谷さんがお認めになられて、後援をしてやろうということになって提供された。

長谷さんはのちに、自邸を「浩然居」って名付けるんですけど、その判子も自分で作られてます。自邸の位置には条件があって、上野から乗り換えなし、駅から歩いて10分以内、土地が安く静かな環境。そこで埼玉県北足立郡蕨町土橋、今の中央3丁目が適切な場所ということになってお住まいになります。今も、蕨は上野から30分ぐらいですから便利です。

長谷秀雄の実力

大谷尊由さんからもらった自邸は、24畳の大きなアトリエのほかに、台所や便所のほか風呂もあったそうです。居室に当たる部分の6畳は、当初、4畳半で設計されたらしいんですが、長谷さんは小さいということで、後援者の細川護立さんに、大きくしてもらえませんかと要望したところ、6畳になったということです。それだけ長谷さんに、実力があたってことなんですよ。そんな人が蕨に住んでたっていうのを私は聞いて、正直、浦和よりすごいかなって、ちょっと自信を持ったところなんです。

下の写真が自邸です。特にみてもらいたいのが、左のアトリエの黒い扉。作品を出し入れさせるところです。今、絵画でもそうですけど、大きいのを作る時に一番初めに気をつけるのは、家やアトリエから出せるサイズにしないととんでもないことになる。一回解体して、キャンバスだけにして、また出して枠をつけたりとかしなくちゃいけないんですけど、作品の出し入れができるところがついてる。この写真をみせてもらった時、ちゃんと考えられてる。家をアトリエにしたんじゃないかっていうのが、よくわかりました。

右は東側から見たものなんですよ。左の低いほうが、4畳半から6畳になった。右の高いほうの下は便所ですね。その右に煙突がついてるんで、風呂があったと思うんですよ。これは2階建てのようなんです。



けど、吹き抜けのあるアトリエ。北の写真はないんですけども、画塾に通っていた方に聞くと、窓があり、一日中安定した光が入って創作活動ができるようになっていたそうです。

右が、親鸞聖人尊像になります。これを作るということで、長谷さんは蕨に自邸を提供してもらえることになるんです。横浜本牧の八聖殿に、現存しています。みると、めちゃくちゃすごいんです。衣に薄く柄が入っています。私は建築なんで、彫刻は全くわかんないんですけど、これにするまでまず粘土で作ります。粘土は柔らかいんで、次に石膏取りして石膏になります。石膏になった後、ブロンズにしていって。3段階あるので、粘土でうまくいってもブロンズになった時、自分の思い通りになるかっていうのは全くわからないらしいんです。だけど、長谷さんのお話だと、自分の思うようにできたということなので、その過程を見事に自分の技法を使って、最終形にできたっていうところはすごいなと思うんですよね。



蕨で作品を作り続けた長谷秀雄の思い

長谷さんが提供してもらった自邸をどう思ってたんだろうなとちょっと考えてみたんですけど、県内の彫刻家の動向についてまとめる中で、昭和27年ぐらいに「彫刻の資材を運搬したり、石膏取りだとか、最終的にブロンズに、鋳物にする時の過程だとかを考える

と、わざわざ埼玉県で作る人は少ない」って話をされています。

ちなみに浦和では、同じく彫刻家の中野四郎さんを知ってる方は多いと思うんですけど、中野さんもやっぱり同じようなことだったようです。浦和の鯛ヶ窪（現さいたま市浦和区常磐）だったけど、彫刻を作るのは大変だったっていうことを奥様が語っています。

長谷さんは大正12年から上野、昭和7年の終わりに蕨に移って親鸞聖人尊像からスタートするんですけども、昭和61年まで蕨を拠点に作品を作られてた。原型になる粘土から石膏、ブロンズなどまでの作業を、ほぼ長谷さんがこの蕨を中心に展開してい

提供を受けた自邸を長谷はどう思っていた？

長谷が自邸の提供を受けた当時、どのような印象や感想をもったかは不明だが、昭和27（1952）年、県内における彫刻家の動向について、作品資材の運搬や石膏取り、鋳造などがあるため、わざわざ都心を離れ、定住する彫刻の大家は少ないと語っていて、戦後、7年を経ても彫刻家が埼玉県を制作活動の拠点とすることに問題があったことがわかる。

ちなみに、同じく彫刻家で昭和5年に浦和町鯛ヶ窪（現さいたま市浦和区常盤）にアトリエと住居を構えた中野四郎も、制作活動に不自由さがあったことを中野の夫人が語っていた。

制作の場としてみれば、相応しい場所とはいえない場所であったが、

大正12年に住み始めた上野輪王寺両大師を離れ、昭和7年の年末から翌8年のはじめの間に蕨へ移り、その生涯を閉じる昭和61（1986）年まで、蕨を拠点に活動した。

長谷が手掛けた作品や作品の原型、試作の多くが蕨で制作され、型取りや鋳造などを経て、作品をゆかりとする場所などに納められた。

長谷の実力からすれば、東京でも成功したと考えられるが、長谷は、蕨の地を肯定的に受け入れてくれたといえる。

きます。それだけの人なので、蕨じゃなくてもいいのでは、という話が出てくるんですけど、長谷さんは、蕨を選んでくれたっていうのが私にとっては大変ありがたい。いろんな不便はあったかもしれないですけども、やっぱり蕨を大事にしてくれたっていう思いを感じてます。

右が次に有名な伝教大師童形像で、左が延暦寺の根本中堂の前、右が熊谷の常光院に現存しています。両方とも天台宗のお寺になります。天台宗の方に



としてはこの銅像は、すごく身近な作品となりましょう。

左の写真の左は、細川護立さんの祖先のひとり、細川重賢の像になります。これも蕨のアトリエで作ってます。

下の写真の左が、朝倉さんに師事した後、朝倉彫塑塾に通った証となる写真のひとつです。真ん中にいる人が朝倉文夫さんと娘さんの摂さんと響子さん、左にひとり飛んで長谷さん。



右の写真は、今の東京都美術館になる前の東京府美術館の内部です。埼玉会館と同じく、前の埼玉会館を設計した岡田信一郎さんが設計したものです。当時の東京府美術館には、洋画室、彫刻室があったそうです。天井高などが変わってたりしたんだと思うんですけどね。



第四回朝倉彫塑展覧會會場其老

長谷が蕨で始めて制作した作品



左の写真の右が、奉安殿の扉についていた御紋章で、長谷さんが蕨に来て3年ぐらい経って、蕨のためのはじめての作品です。当時の社会情勢からいうと、学校云々じゃなくて、町が奉安殿を作って、天皇皇后両陛下を大事にしようっていう思いが建物に表れますので、その紋章を作るってなると、それにかなう人物じゃなきゃできない

いということで、長谷さんのところに依頼があったと思うんですね。ちなみにこの紋章は、高砂小学校と変わらないぐらいの歴史をもつ蕨市立北小学校に現存してます。

戦中戦後の物不足の中で作り続けた作品

長谷さんはどれぐらいの実力があつたのかをみていくと、日本芸術家名鑑に長谷さんの名前をみつけることができます。ほかの名前をみたんですけど、埼玉県は長谷さんだけ。朝倉文夫さん、北村西望さん、平櫛田中さんなどの中で、長谷さんの名前がある。長谷さんの実力が認められてたことがわかんと思います。



『日本芸術家名鑑関東部（昭和17年）』

戦中期における彫刻手法を展開させた制作活動



ただ、戦争中は物がないので、作品を作るのは大変だった。同じようなことはいろんなところで聞けると思うんですけど、長谷さんも同じです。

左はきりつば彫刻っていうんですけれども、岩槻にあるような木目込み人形の技術を使っています。岩槻では胡粉とかを塗るんだけど、長谷さんはラッカーだとか、西洋画に使われるような材料を使ってました。その中のふたつが帯留めです。2センチぐらいです。ちなみにきりつば彫刻という名前は、朝倉さんがつけてくれています。

（次頁の写真）右は、戦後に作ったペーパーナイフです。戦後も物がないので、彫刻を作るのはなかなか大変だった時です。材料となる竹は、長谷さんの出身地である別府から送ってもらい、こういう形に加工しました。実はこれ、フランスに輸出されてます。当時

戦後期における彫刻手法を展開 させた制作活動



は進駐軍がいて、「こういうものを作ったんだけど売する方法ないですかね」って聞いたら、「僕はアメリカだけど、フランスで売った方がいい」って言われたそうです。相当な量を作ったようで、元塾生に聞くと、削る前の定規のような材料が2千本から3千本ぐらい送られてきたと。これらはいつの間にか全部なくなっ

てたとのことなので、長谷さんはデザインから加工までやって、フランスに輸出したんだと思いますね。このうちの何本かはご遺族と蕨市内の方がお持ちです。

国宝の複製から、山梨、沖縄、大分に残る作品



左の写真の左は、深大寺にある国宝です。長谷さんは高度な技法を持ってるということで、複製を作る機会を得ています。石膏取りをしているところですね。複製はふたつありまして、東京国立博物館と深大寺に納められています。

右の左下は長谷さん、学生服を着ているふたりは画塾の学生さんで、真ん中は新制作協会の会長になられた加藤昭男さん。左は榎本善之助さ

ん、西高（埼玉県立浦和西高校）と浦高（埼玉県立浦和高校）で美術の先生をやってますので、知ってる方もいらっしゃるかもしれません。

右の写真は山梨の母子像です。左がオープニングの写真で、真ん中が移転先の写真。右は、これを小さくして沖縄に寄付されたものです。当時、沖縄は日本じゃないので、大変だったと思うんですけども、現存してます。

（次頁の写真）左は、建築をやっ

てる私として、やっぱり長谷さんってすごいなと思った1枚です。後ろの真ん中に長谷さんがいるんですけど、右にひとり飛んだ青年が磯崎新さんという有名な建築家です。磯崎さんのほぼデビュー作となるアートプラザ（旧大分県立大分図書館）が竣工した時の記念





左（筆者撮影）

長谷秀雄の著作



パーティーだそうです。アートプラザには、長谷さんの作品が1点、現存してます。図書館建設に寄付された方だそうです。

右は長谷さんの著作。私が知っているかぎり「長谷秀雄自選彫刻」、自分の経歴を書いた「随筆画窓漫語」。長谷さんは歌人としてもその筋で有名な方だったので、歌をまとめた「浩然居歌集」の3冊です。

浦和に残る作品と埼玉県美術教育の発展を支えた功績

右の写真は、浦和に残存する作品になります。玉蔵院境内の前庭と、裏門通りの稲荷湯、さいたま市立本太中学校にある中野等さん。中野さんは中学校の土地を寄付した人です。稲荷湯の前にある胸像は、元々、埼玉会館とって、お風呂屋さんの組合の建物にあったものを遺族が引き取って置いたものです。

このほか個人ですけれども、ふたつお持ちです。ひとつは川久保病院さんの初代の川久保義典さん、今の方のおじいさんで浦和市長だった方の像、もうひとつは長谷秀雄さんの個人的な作品です。

浦和に残る長谷秀雄の作品 (筆者撮影)



玉蔵院境内前庭



稲荷湯前



さいたま市立本太中学校

左は、埼玉県の県展がどうやって作られたかっていうことをまとめた「埼玉自治昭和60年」なんですが、長谷さんの名前がいっぱいあるんです。当時、高田誠さん、寺内万治郎さんらを中心に、長谷さんがその事務方として一生懸命活動したっていう話があります。

別所沼の脇に昔、2階建ての埼玉県立美術館っていうのがあった。これが埼玉県で戦後の美術の殿堂をつくろうという運動の始まりになります。ただ、お金ないんでどうするかって考え



【埼玉自治
昭和60年】

た末、鉛筆を売って建設代金に充てようという手を思いつきます。この中心になったのが、長谷さんなんです。鉛筆のメーカーは「ヨット」と「地球」。

「地球」は、長谷さんとなつがりがあって、オーナーさんの胸像を作ったりするぐらいの関係だった。「ヨット」は当時、川口の青木と飯塚に工場があったんで、2社の鉛筆を売って建設代金に充てようという運動になって、加藤勝重さんと長谷さんが毎日出勤して注文に対応していました。

長谷さんは、自身の活動とともに、埼玉県のためにいろんなことをやって美術教育を発展させようと、裏方として一生懸命やってくれたんですね。ちなみに右下の真ん中に写る方は、栗原浩県知事です。（ホール入口に向かう大階段の左外壁にある）「埼玉会館」の文字を書いた人ですね。

蕨画塾誕生

蕨画塾の誕生

長谷が制作の拠点にしていたアトリエを昭和21年4月に開放したことをはじめとする。同22年4月に私塾 蕨画塾として歩みを進め、翌23年7月に埼玉県から各種学校の認可を受け、教育施設として戦後、埼玉美術教育の一翼を担うことになる。

塾生を指導した顧問や講師は画家 中沢弘光、安井曾太郎、寺内万治郎、奥瀬英三、島野重之、金子徳衛、田中青坪、浦崎永錫、彫刻家 長谷孝雄の9名であった。この後、昭和24年の時点で樫宏治と山口平八が加わり、樫は解剖学、山口平八は美術史を指導した。昭和39年5月にその歴史を閉じるが、ここで学んだ塾生は1300人を超え、後の美術界を牽引する人材を数多く輩出した。

解剖学の初代の教授、深谷で歴史を研究されてた山口平八さんという早稲田出身の方も歴史学で加わってます。

39年の5月にその歴史を閉じますけれども、大体1,300人を超える塾生の方がいた。なので、自慢してください。今もいろんな研究所がありますが、この時代にこれだけの人が全国から集まっていたというのは、私が知る限り聞いたことがありません。

ところで蕨画塾を作った理由は、空襲で勉強できる場所がなくなったんで、「長谷のアトリエは広いから、やってくれ」といわれたという話が伝わってはいるんです。ただ実際



蕨画塾を創立した理由

東京が戦災で焦土と化し、東京芸術大学を受験するもの、地方から美術家を頼ってでてきたものたちの勉強する場所がなくなり、長谷のアトリエが広いということで面倒をみるようになったとされているが、実際は、長谷がこれまでに関係した文化運動から学んだ教訓をもとに自身の経験、資力をもって芸術文化の実践運動を興したいという思いをもって創立した。

長谷は創立にあたって昭和21年の終わりから「蕨画塾設立趣意書」を書きはじめ、長谷がかつて勤めていた書店の経営者につながる親族で長谷のもとから東京大学に通っていた古後実朗に清書させ、翌22年のはじめから関係者に届けた。届け先には蕨画塾の顧問・講師に名を連ねることになる中沢や浦崎のほか、彫刻家の関野聖雲、画家の和田英作がいた。また趣意書に並行して金子徳衛と古後が各種学校の認可に向けた準備を進めた。

のところは、長谷さんは戦前から文化運動に呼ばれ、いろんなことをやるんですけれども、なかなかうまくいかなかったことから、やるなら自身の経験のほか、資力、財産をつぎ込んで、芸術文化の実践運動を興したいという思いで作られたのが蕨画塾になります。

作り方もしっかりしていて「蕨画塾設立趣意書」をまとめ、いろんな方にお話しして、皆さんに協力を得られるという形で画塾が作られます。彫刻家の関野聖雲さん、東京美術学校の校長を務めた洋画家の和田英作さんにも長谷さんの名前は知られていて、連絡しています。

長谷さんの恩をアトリエ増築で返す塾生たち

アトリエは24畳であったが、長谷の作品や制作に必要な機材もあったと考えられるため、決して広いということではない。このため、3名の塾生が費用のほか、手間を提供するとうことで、昭和24年に12畳と6畳のアトリエを増築している。ちなみに増築した部分は総2階建てで、2階はアトリエ以外の用途にした可能性が高い。

アトリエは24畳って広いなと思うんですけども、彫刻をやった方に聞くと、24畳と言っても思うほど広くはないんです。狭くて大変だっていうんで、塾生の3人がお金を出すので増築させてくださいってお話しされます。普通、手間は出すけど

どお金は出さないっていう人が多いと思うんですけど、お金も全部持ちますと。画塾で受けた教育や環境っていうのが素晴らしかったということで、私たちが一肌脱げることは何だって考えた上で、増築に至ったと思います。

実際、長谷さんはいろんなところで塾生の面倒をみてるんですよ。そのひとつが塾生の下宿として使われた足立屋という酒屋さんです。場所は蕨画塾の道路を挟んで反対側。当時、何人か酒屋の配達人が住んでたところを、画塾生のために

長谷の協力で塾生の下宿所となった酒店
(個人蔵)



初期における蕨画塾の動向

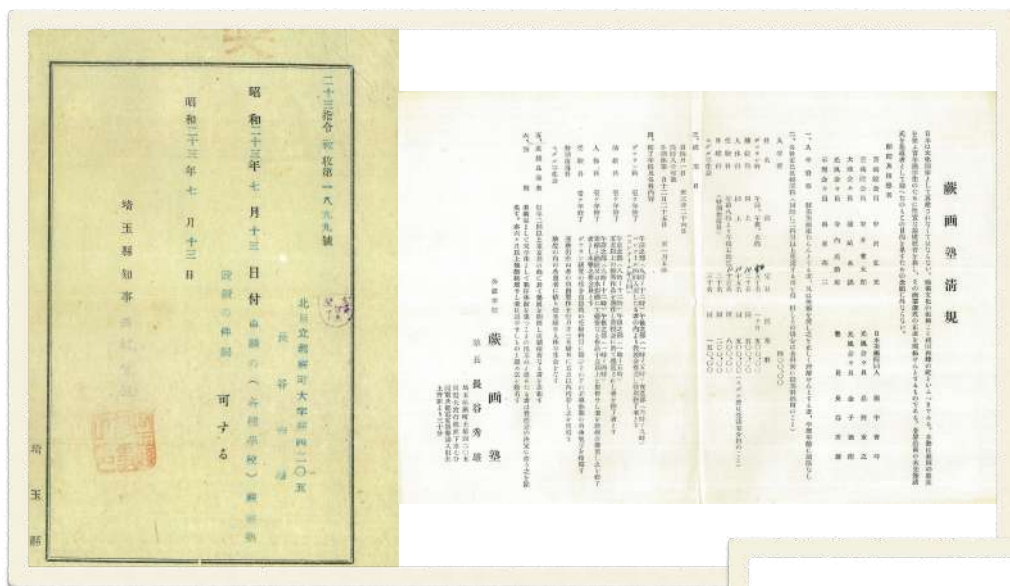


て、長谷さんが頼んで住まわせてもらっています。

左が、初期における蕨画塾の動向なんですけど、右にあるように、「画塾展をやります」ということで、当時の「みずゑ」、「アトリエ」という雑誌に広告を出しています。この時は「まだ塾生がいまだみるべき

実力がないので、指導者を中心とした展覧会になってます」ってということなんです、こういうものを作って皆さんにお配りしてるところは、今も美術家の人たちが自分の展覧会をやる時にいろんなものを配布したりするのと同じですね。この時代は物もないですから、こういうのを作るにもお金がかかるんですよ。これも長谷さんの全部持ち出しだそうです。それだけ、蕨画塾にかけの思いが強かったってことです。とにかく、自分でやれることは全部やる。

公認学校蕨画塾は、絵を切ったら血が出るレベルを目指す



右が蕨画塾清規で、画塾のルールをまとめたもの、奥瀬英三さんの名前があります。左が埼玉県から各種学校に認可したという証明書。いずれも原本です。県は持ってないそうです。5年経ったら処分だから。こういう資料が今でも残っている

ということは、ご遺族が本当に大事にされていたということがよくわかる証のひとつになります。

右は蕨画塾の広告で、「美術手帖」に出てます。昭和24年は公認学校って入ってないんですけど、25年には公認学校と入ってます。公認学校を取るのは大変なので、そういうところにおいても、きちとしたルールで画塾を発展させていきたかったというのがよく分かります。

芸術新潮は、「蕨画塾は純粋な研究所です」ということを書いたもので、予備校でもない、日曜絵画教室でもないという評価です。どういう教育だったのか気になりますが、寺内さんはちょっと素人に毛が生えたぐらいの塾生に「君たちの絵は切っても血が出ないけど、私の絵は切ったら血が出ます

蕨画塾の広告



『美術手帖（昭和24年3月号）』



『美術手帖（昭和25年2月号）』



『芸術新潮（昭和28年1月号）』



『芸術新潮（昭和28年8月号）』

から」とビビらせたそうです。それだけ高度な技法を研究できる場所が蕨画塾だったんですね。確かに寺内さんはデッサンの神様って言われたこともある方ですからね。

蕨画塾については、寺内万治郎展で作られた本にも載っているんですけども、ここで金子徳衛さんは「蕨は、戦後しばらくは東京に研究所がなかったせいもあって、全国から集まってきました。東京に下宿して通った人もいたんです」、また「少し大げさに言ったとしても、蕨画塾は戦後の美術界にいちはやく火をともしたと思います」と言われてますので、それは間

違いないと思いますね。

蕨画塾は東京藝大蕨分校

右は、長谷さんがどれだけ評価を受けたかっていうことのひとつなんですが、埼玉新聞で毎年発表されている埼玉文化賞の芸術賞を授与されています。長谷さんは第1回から審査員をやったたそうで、受賞した方をみると、奥瀬英三さん、寺内万治郎さん、高田誠さん。こういう人たちを長谷さんは立てる。自分はいくまでも裏方に徹しようという姿勢がよくわかります。それが自分の受賞となって、「毎年、審査員になれといわれるけど、今年は話が来ないのか」と思ってたから、自分が受賞することになった。「ああ、そういうこともあるのか」という感じだったそうです。この話は埼玉新聞（昭和41年10月27日号、11月3日号）に載ってます。授与された時の記事には、「24年の東京藝大の



『寺内万治郎展』



『埼玉新聞50年史』

『三彩（昭和50年1月号）』



埼玉新聞（昭和41年10月27日号）

埼玉新聞（昭和41年11月3日号）

埼玉新聞（昭和41年10月27日号）

彫刻科に合格者が23人いた中、蕨画塾が12人合格。50%超えてます」と書いてあるんですね。それだけ画塾は高度な技術を教えるところだったというのがわかります。藝大に人材を送り出せるとんでもない学校ということになります。左の記事では、それを裏付けるかのように、当時東京藝大の教授だった安井曾太郎さんが、「蕨画塾をして東京藝大蕨分校」と言ったぐらいの実力があったということです。寺内さんの話じゃないですけど、切って血が出る絵ってというのがどういうものなのか、よくわかると思います。

蕨画塾から巣立った美術関係者の活躍ぶり

ここから、特に埼玉と浦和ゆかりの画塾生ですけれども、洋画では田中実さん、川村親光さん、寺井力三郎さん、小松崎邦雄さん、高木康夫さん、五月女幸雄さん。知ってる方がいっぱいいらっしゃると思います。浦高の方が多いです。女性は一女（埼玉県立浦和第一女子高校）ですね。日本画家では、後藤純男さん、大野逸男さん。

彫刻家では、加藤昭男さん、麦倉忠彦さん。大野さん、麦倉さんは埼玉文化賞の芸術賞を授与されてます。寺内幸雄さんは、寺内万治郎さんの次男で、藝大を出て岸中（さいたま市立岸中学校）で美術の先生をやってましたね。石沢ミヨさんは、浦和の郵便局に勤めてて、画塾に行って、藝大の彫刻に入って特許庁に勤めてます。

美術評論家では、2～3年ぐらい前に亡くなりました長谷川栄先生、昔の市民会館の前に稲妻みたいな彫刻があったんですけど、その作者ですね。田中薫さんは宮崎の公立大の先生をやられてるんですけど、この方は浦高だったので、浦高の記念誌の編集担当者でした。

建築家は、偉大なる先輩方です。三浦功さん、山本厚生さん。山本さんは「収容所（ラーゲリ）から来た遺書（辺見じゅん著ノンフィクション作品）」の主人公、山本幡男さんの息子さんです。画塾に通って藝大の建築学科に入ります。中原暢子さんは、一女から武蔵工業短大に行って建築家になった方で、埼玉で何軒もの住宅、寺院を設計してます。私が知るかぎり、住宅は浦和の西と東に2軒が現存します。林昌二さんは、日建設計で設計をリードされた方です。伊佐周さんは、藝大生がコンクリートをこねることで有名な前田環境美術に勤めた方です。工芸家では、教員になった榎本善之助さんです。

教育家では「すいどーばた美術学院」という予備校を作った高澤節さんも、蕨画塾です。水野善文さんは藝大の彫刻を出た後に慶応義塾志木高校に勤めています。面白い話がありまして、慶応で一生懸命美術を教えたらいけない。なぜかっていうと、「そっちに行っちゃうと自分たちの家でやってる本業がおろそかになるので、静かにしてくれ」って、父兄に言われたそうです。中沢明子さんは、西角井家につながる方です。

特に埼玉、浦和ゆかりの画塾生

洋画家

川村親光、寺井力三郎、志村武久、遊馬正、若山順子、臼井喜一
瀬社家知子、関口美和子、吉田三朗、田中実、志村武久、山田弘道
小松崎邦雄、高木康夫、金子仁三郎、浦野昭二、相馬貞夫、福田勝汎
五月女幸雄、森慧、黒田穰、小林辰也、鯨井洪、木下恵之、松田襄
斉藤晃司、長田良夫、宮下勝行、山崎峻、勝木健吉、高木康夫、塩見
栄一、小林辰也、桜井充、林川穂、川手稔子、内田光之助

日本画家

後藤純男、大野逸男、黒澤吉藏

彫刻家

加藤昭男、麦倉忠彦、寺内幸雄、石沢ミヨ、島田忠恵

美術評論家

長谷川栄、田中薫、友部直、金杉舒一

建築家

三浦功、山本厚生、高達浩、中原暢子、林昌二

環境デザイナー

伊佐周

工芸家

榎本善之助、増田昌弘、黒木章

インテリアデザイナーの寺内健三さんは寺内万治郎さんの三男です。この方もお亡くなりになってしまいました。連絡を取り合っていたんですけど。蕨の者ですって言ったら、「久しぶりだな、蕨って聞いたのは。僕、実は蕨駅のキオスクを設計したんだよ」と言われて、蕨とのつながりがずっと残ってたんだなと思いました。

造形家の佐々木明さんは、成田亨さんとともにウルトラマンの顔の造形を作った方です。このほか、織物彩墨画家の田島隆夫さんは、着物がすごく好きだった白洲次郎さんの奥さん、正子さんの着物も織られていて、正子さんから「あなたは織師と名のりなさい」と言われて、織師という名を使うようになったそうです。

アニメーター、特殊撮影家、イラストレーター、そして一番下にある画材店経営の川畑夏子さんは、裏門通りにあるコバルト画房を戦後すぐにお父さんと始めた方です。今はこの方の娘さんのご主人が跡を取られてますね。

こういうことを踏まえた上で、ちょっと私なりに考えますと、蕨画塾が戦後美術教育の展開と人材を育成した。そして、埼玉の美術家連盟や県展、今日の近代美術館につながる埼玉美術の殿堂の誕生に、長谷さんは関わっていた。

おわりに

これらを踏まえた上で、私見を示すと

戦後、埼玉美術教育の展開と人材の育成、埼玉美術家連盟と埼玉県展、今日の埼玉県立近代美術館につながる埼玉美術の殿堂の誕生に長谷秀雄が担った役割は非常に大きいことがわかる。

蕨にとって長谷秀雄は、

大恩人のひとり！

というだけでなく

埼玉にとっても長谷秀雄は、

大恩人のひとり！

特に埼玉ゆかりの画塾生

教育家
高澤節、武井粧之、水野善文、横田稔、中沢明子
グラフィックデザイナー
出牛実、杉田豊
インテリアデザイナー
寺内健三、月岡良太郎
染織家
松永勲、西耕三郎
造形家
佐々木明

押絵画家
遠山スズ
水彩画家
関根宮夫、堀英治、浦野昭二
織物・彩墨画家
田島隆夫

アニメーター
木下峻治
特殊撮影家
幸隆生
イラストレーター
阿部隆三
画材店経営
川畑夏子

蕨にとって大恩人なのですが、埼玉にとっても長谷秀雄さんは大恩人ではないかと。皆さんにもぜひ、蕨に長谷秀雄さんというすごい方がいたということを広めていただければと思います。



第3部 隣の芝生を見に行こう

街並みに歴史民俗資料を残す蕨

青山：これは、蕨市立歴史民俗資料館の隣の本陣跡の建物で、このデザインの監修をしたのが谷口吉郎(*1)さんなんですね。彼は木曽の馬籠の同じような本陣跡を設計した人で。

浦和宿は本当に、何もこういうのがないんで、すごい羨ましかったんですね。一応、浦和宿という石碑はあるんだけど、蕨はしっかりこういうことをやってるんですね。中山道に面して資料館があって、竹田さんのような優秀な学芸員がちゃんとして、2千万円を模型にかけて。だから本当に隣の芝生がよく見えるんですよ。これもちゃんと新聞（埼玉新聞「埼玉の建築スケッチNo.12」）に書いてました。

とにかく周りを水路で巡らすというのは、初め僕がイメージしたのは、奈良の環濠集落というのがあって、僧兵とかそういう部隊まで持っていて、すごい権力を持った強い防御の街だと思ったんだけど、竹田さんの話を聞くと、どうもそんなにガチガチの守りじゃなかったみたいだね。だから橋がパタンって渡れるのがあって、夜になると開けちゃうっていうのがあったんだけど、それも水路の幅もそんなに広くないんですよ。奈良の環濠集

隣の芝生を見に行こう

2026年3月14日
埼玉会館
青山恭之



落に行くと3間ぐらにある水路が本当にある。そういう意味では、初めに僕が抱いていたすごい防御よりはもうちょっと柔らかい仕切りっていうのかな、そんな感じがしてきました。

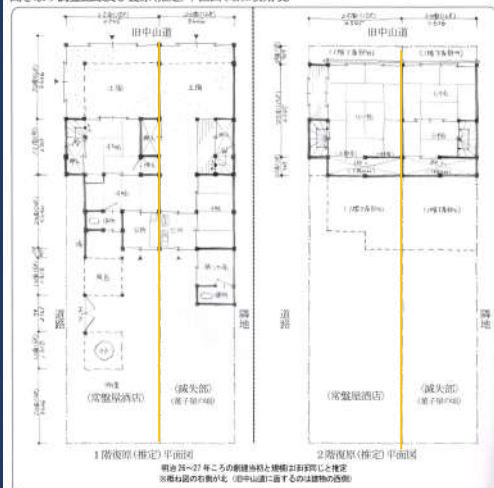
これは金子吉衛邸ですね。蕨の市長もやった方の家なんです。この辺のことも新聞（埼玉新聞「続・埼玉の建築スケッチNo.7」）に書きました。

浦和の中山道の面影は

これが常盤屋酒店っていう浦和の中山道の景色なんですけども。見てください、本当にもう周りがビルでいっぱいになってしまってます。これ、ここで切れてるんですよ。元はこの2倍近くの間口があったところを半分にして貸していたということで、



(*1)谷口吉郎：吉郎氏は金沢育ちの建築家で、東宮御所の設計やその他建築界での数々の功績を認められて文化勲章を受章するとともに、金沢の景観まちづくりにも尽力した人物です。吉生氏は世界で活躍する一方で、金沢に鈴木大拙館などの設計を通して、金沢の新たな魅力を創出しています。（谷口吉郎・吉生記念金澤建築間 <https://www.kanazawa-museum.jp/architecture/about/index.html>より）

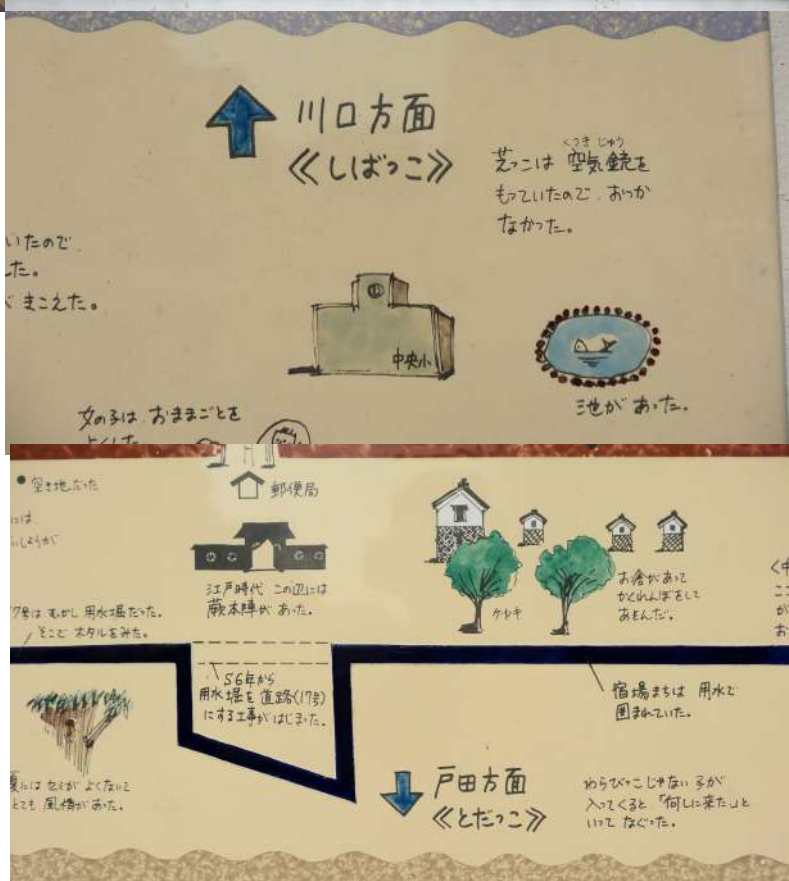




ぱいいた」とか「お寺の鐘が聞こえた」
とか「雷魚がいた」とか、そういう記憶
が描かれてる。

この中に、「こっち方向は」浦和方向
で「ぶぞっこ」と書いてあるんですよ。
わかります？ これ。蕨の子にとっては浦
和の子は「ぶぞっこ」だと。文蔵（ぶぞ
う）という地名があるんですよ。浦和は
「ぶぞっこ」なんですって。それで北の
方、川口方向は「しばっこ」っていう。
川口に芝っていう地名があるでしょ。そ
れでここ、「芝っ子は空気銃をもってい
たのでおっかなかった」って。子どもが
こういうこと書いてるんですよ。さら
に戸田方面は「とだっこ」。ここがすご
い。「わらびっこじゃない子が入ってく
ると「何しに来た」といってなぐつ
た」。子どもがこういうことを言ってい
たってことにしてるんだけど、こうい
うのを堂々と、しかも表の中山道側に向けるんじゃなくて、内側に向けて書いてるあたり
が、蕨って本当に排他的だと思ったんですよ。

その辺はやっぱり、宿場の周りをぐるっと水路で巡らして。ここに太い黒線が入ってる
でしょ。内と外の意識がすごい強いのかなと。それが、今までずっと合併の話が随分あっ
たんですけど、断り続けて蕨という自立した集団というか、やっぱり浦和と違うなっ
ていう感じですよ。



素敵な通りや街並みが残る蕨は散策も楽しい

今、こういうウォーキングマップがホームページからダウンロードできるんですけれども、赤いルートが8,000歩コース。僕は今まで、蕨駅から歩いてこの和楽備神社とか北小学校とか三学院とか、ずっとここばかり見てこの辺はだいたいわかってたんだけど、その他の蕨ってどうなんだってわかってなくて、急遽、今週の月曜と火曜に、このふたつを歩いてきたんですよ。8,000歩っていうと、ちょっと寄り道したり道に迷ったりしたんで、3時間ぐらいずつかかったんですけども。

ここが「要害通り」って言って素敵な道。それから南町桜並木遊歩道もいい道なんです。素敵ですよ、この辺。ここにあるこの銅像は、浦和のさくら草通りにある銅像と似てるなと思ったら、作者は細野稔人さんでした。実はこのフォーラムは「美術と街巡り・浦和」っていう活動の中でやってるわけですが、細野さんは「美術と街巡り・浦和」を一番最初に立ち上げるきっかけとなった人で、その細野さんの彫刻が蕨にもあるのは、やっぱり浦和と蕨は仲良しなんじゃないかって思います。それが蕨と浦和の文化交流みたいなことだったと思うんですけども。

蕨は公園がいいんですね、いっぱいあるし。この「まつのき公園」っていうのは、裏に「くるみ保育園」っていうのがあって、保育園の庭があって、こっちに「交流プラザさくら」があるんだけど、それらが一体になってるんですよ。本当に塀を乗り越えて来てもいいぐらいな感じで、ちゃんと見守ってる人もいたりとか、とてもいいです。これは塚越公園。だから蕨って、住みやすいと思うんですよ。コンパクトシティだし、こういう素敵な銭湯もあったり、和菓子屋さんもこんないのがあったり。





蕨市民会館
土屋巖
1974

この絵は、蕨宿の地区を出て浦和へ向かう途中の端っこの左側にある家なんだけど、一番、街並みが残ってる感じがするんですよね。これも新聞（埼玉新聞「続・埼玉の建築スケッチNo.179」）に書きました。これは前川さんの弟子だった土屋巖さんが作った蕨市民会館です。これも新聞（埼玉新聞「続・埼玉の建築スケッチNo.251」）に書きました。

これはアトリエラビリンス建築環境設計の芳賀敏夫さんっていう藝大出の建築家がいるんですけど、彼がやった作品がこんなところにあったと思って。これは駅のそばの集合住宅、下駄履き型。下に飲食店街があって、通り抜ける道があって、こっちに階段がダーッと見えてるんですよね。こういう不思議なビルディング、蕨の駅前あたりのごちゃごちゃした感じなんだけど、こういうなんか不思議な建築がある。



蕨北小と浦和高砂小を立ち上げた石川直中

このチラシを作る時に、表面を蕨のお話にして、裏面は浦和のことを書こうと思ってたんですけども、大事なことがあったのが、浦和と蕨の教育的な活動のつながり。この背景に書いてある絵は、僕が高砂小学校の150周年の記念誌に向けて描いた明治30年ぐらいの浦和なんですけども、ここに出てる肖像が、石川直中という方で、蕨北小という浦和の高砂小学校より先にできた学校と高砂小学校と両校の校長をやられた方です。だから、埼玉県教育の一番原点にある人で、蕨と浦和の小学校を立ち上げたという意味ではとても重要な方です。この石川先生の銅像が、高砂小学校に立ってます。開校120周年を記念して造られたもので、作者は当時の児童の保護者。藝大で教鞭をとられていた飯野一朗さんです。この間の155周年記念の式典では、この石川先生の動画を学校でAIで作りまして、石川先生の生の声が聞けました。この石川先生の研究をされているのが竹田真依子さんなので、竹田さんの石川論というのが蕨市立歴史民俗資料館の研究紀要の中にあります。ぜひ読んでみてください。

5回目となるフォーラム「まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす」は、「美術と街巡り・浦和」のイベント・プログラムです。前回（昨年）は、主に大正・昭和初期の浦和・大宮が、台地上にある「高橋の地」として画家をはじめとする文化人たちに注目されてきた歴史を紐解きました。その「浦和画家」たちのうち寺内篤治郎・奥瀬英三などが「蕨画塾」の講師としても活動し、県内美術の普及に尽力してきました。また、明治の教育の黎明期に蕨は先進的な備えを示し、後の文教都市浦和を導いたのです。さらに言えば、江戸時代に隣の沼田町とつながりながら、浦和と蕨は全く異なる街の構造を示していました。そのことが、現在蕨には何軒もの町屋建築が残されていることにもつながっていると考えられます。江戸期から戦後までの二つの「まち」を見ていくことで、それぞれのアイデンティティが浮き彫りにされればと思っています。（青山裕子）

● 講演者プロフィール

竹田 真依子
（たけだ まいこ）
蕨市立歴史民俗資料館学芸員
国学院大学文学部史学科、国学院大学文学研究科（博士課程前期）修了。蕨市立歴史民俗資料館学芸員（非常勤）を経て現職。近年では近世後期の蕨市町並みに関する研究を発表している。

高松 敬
（たかまつ けい）
一般建築士、ヘリテージマネージャー
t+t design
工学院大学大学院建築学専攻修士修了。埼玉県内に現存する寺安蔵建築やその他の近代建築、埼玉県ゆかりの建築家・宮岡啓七、浜名園吉、宇野良一、二本松孝蔵、北村甲子之助、土屋巖、三浦功、蕨市に現存する住宅型前三和町住宅地、蕨をゆかりとする芸術家・長谷秀雄、金子俊樹、刀根研二、牛越誠夫、飯塚章の調査にあたる。

明治初期の蕨・浦和・戸田地域の教育に尽力した石川直中※2

出版
※1「蕨市立歴史民俗資料館 研究紀要」第20号
※2「さいたま市立高砂小学校 開校百五十周年記念誌」

参加申込方法
職員無料、定員100名 申込期間：2月8日（日）から定員に達した時点で締め切らせていただきます。
●申込みフォームでのお申込み Q（QRコード）よりご利用ください。
●メールでのお申込み 下記①～⑥を明記の上お申込みください。
①氏名（姓） ②住所（〒） ③電話番号 ④Eメールアドレス
⑤人数 ⑥同行者氏名 送付先：info-kalkan@saf.or.jp
※氏名に「1/14フォーラム参加申込」とお書きください。
●窓口でのお申込み
埼玉県11ヶ所にて申込用紙にご記入ください。受付時間：休館日を除く 10:00～19:00
※最新情報は、埼玉会館ホームページをご覧ください。

埼玉会館 SAITAMA HALL
〒330-8518 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-1-4
お問合せ Tel:048-829-2471(代)
休館日を除く 10:00～19:00
Mail: info-kalkan@saf.or.jp
https://www.saf.or.jp/saitama
電車でのアクセス JR 宇都宮線・高崎線・京浜東北線・浦和駅南口 浦和駅(西口)下車 徒歩6分

第4部 トークセッション

身近に接していた美術の先生も蕨画塾生だった

参加者A：蕨画塾の関係で、私、小学校、中高と浦和だったわけですが、小学校で田中実先生にお教えいただきました。中学校では浦野昭二先生、高校が榎本善之助先生という経験をしました。その当時はこんな偉い先生方と思ってなかったわけですが、後ほど知ることになりまして、今日もお三方の名前が出たので大変懐かしく、嬉しく思いました。ありがとうございました。

高松：今、3人の名前が出たんですけれども、すごい方がいらっしゃる。高校は西高ということですね。当時、だいたい藝大には3人ぐらいは常に入れてたらしくて、4人になると新聞に載るそうなんですけど、「3人だと載らないんだ」って榎本善之助さんが言っていました。その後、浦高に行ったら、慶応の話じゃないんですけど、「うちの子供に美術を教えるな」と。「うちは医者だから」「うちは弁護士だから」「うちは一流企業に勤めなきゃいけないので、美術を教えると帰ってこれなくなっちゃうから」って言われたんだって話していました。

本の須原屋さんは美術活動にも尽力されていた

参加者B：蕨画塾で名前が出た五月女幸雄さん。私は五月女さんの奥さんとはよく会ってますけど、五月女さんのまだ木崎にいた頃、お子さんが慧（ケイ）ちゃんっていう女の子で、ベビーシッターをやったことあるんです。それが今、慧ちゃんは有名なピアニスト（五月女慧）になっていて、南浦和にある文化センターでコンサートを見に行きました。五月女さんとのいい思い出です。

それと私は、50代の終わりに胃がんの手術をして、そのリハビリで日本橋から京都まで中山道を4年ちょっとかかりましたが、歩いて完走しました。それでやっぱり浦和宿は何もないんですね。坂本宿（群馬県安中市）は、ちゃんと1軒1軒、名前が書いてあるんですね。昔の商売も。それで一番大変だったのが和田峠（長野県）。あそこは登って下るのに6時間かかりました。そういった中山道のいい思い出があります。

その後しばらくして、甲州街道も諏訪から日本橋に向かって完走しました。あと残っているのが日光奥州街道と東海道。それらをいつか完走してみようと思っています。

高松：木崎の話は詳しくないんですけど、与野で奥様が喫茶店をやっておられ、何回か通わせていただいたことがあります。

今度、まち歩きがあるんですね。須原屋さんが初めて公開になるんですけれども、五月女さんが埼玉大学の学生だった時、須原屋さんにはギャラリーがあって、「相当過激な展覧会をやったんだけど、須原屋さんは偉いよ。大丈夫だからやっていいよって言ってくれた」というお話を聞きました。須原屋さんは、美術活動にもご尽力されてたところだ

と知りました。今回のまち歩きで須原屋さんが開かれるということですので、今後もずっと続くといいなと思ってます。

歴史をどのように残すか

高松：青山さんがみせてくれた写真で、ビールケースが並んでたところは、私が映した古い家の写真と同じ足立屋さんという酒屋です。要害通りの足立屋さんの反対側に、蕨画塾がありました。やっぱり場所的にはいい感じのところだったんです。

参加者C：私は蕨生まれ、蕨育ちで、今も蕨駅を最寄り駅に使ってます。浦和に勤めている時間が長かったんで、浦和画家の話は、仕事柄アートに関わっているので結構よく聞くんですけど。でも蕨で智内兄助先生とか奥瀬英三さんの奥さんにちょっと話を聞いたら、蕨画塾というのがあった。それなのに何で蕨の手前で止まっちゃうのか、もうちょっと繋がってほしいなという気持ちが今まであったんです。

ちょっと幼い頃からの父や祖母から聞いた話をなんか思い返してみると、かたくなに中山道の人は蕨駅を中山道の近くにつくことに反対していたっていう話を聞きまして。あ、これ、もしかしたら中山道の街並みを残しておきたかったのかなっていうのがちょっとありましたので、中山道に興味湧いていろいろ聞きたいと思いました。

今日は本当に感謝いたします。ありがとうございました。

参加者D：最近、奥瀬英三さんのご自宅がきれいに解体されてるのを見たんですけども、今後どこか場所を変えて再建されることはあるのでしょうか。土地は売られてしまったような雰囲気なんですけれども。私、寺内万治郎さんの孫と同年で、よくアトリエで遊ばせてもらったり、小学校は田中実先生に教わったりしたので、とても浦和の画家に興味がありました。

青山：奥瀬さんのアトリエは現在、土地は売られただけではなくて、もう新しい建物が3つぐらい建っていますね。大きい家だったんです。

高田誠さんのアトリエは壊されるということで、最近、さいたま市の方で測量して3Dのモデルを作って。公開されているのかな。瑛九さんのモデルは公開されてますけど、高田誠さんのアトリエの内部のイメージっていうのは今まで全然なかったので、僕も初めて見て参考になるなと思いました。

それから、瑛九のアトリエの方は今度、かつてここに瑛九が住んだっていうプレートを、新しくできた集合住宅の前に建てるっていうことが実現しますので、本太の場所に行くと、その集合住宅に入った人もそれを誇りに思えるんじゃないかな。僕らはアトリエは残せなかったですけども、多少そういうことまではできたかなってちょっと思っています。

山海：ありがとうございました。

